教育実習を終えて

英語英米文学科　４回生

母校の高校での三週間の実習は、長いようで短く、あっという間の日々でした。実際に現場で三週間過ごし、本当に様々な発見がありました。

まず一つ目は生徒の関わり方について。最初はどう接していけばよいのか全然分からず、とても戸惑いました。しかし、待っているだけでは駄目で、自分から生徒と関わりを持たなければならいということに気づかされました。まずは生徒一人ひとりをよく見て知ろうとする、そしてそこから人間関係を築いていくことで、生徒との「信頼」も生まれてくるということを学びました。

二つ目は教科指導について。私は、英語Ａ（Reading）、英語Ｂ（文法）の二つの授業をしましたが、ナマの高校生を目の前に行う授業は想像以上に大変で、自分の知識のなさを痛感しました。特に初めての文法の授業では、説明しているうちに自分自身が混乱してしまったり、生徒からのいきなりの質問にも戸惑ってしまったりと、授業後はとても落胆しました。その中で、教材研究の大切さをとても実感しました。教材研究をすればするほど、自分への自信にもつながると思います。そして、自分が一生懸命やれば、生徒もそれを感じてくれる、応えようとしてくれる、ということに気付きました。「先生、今日の授業楽しかったよ！」という言葉に本当に励まされ、エネルギーをもらいました。そしてそこから「次はもっといい授業にしたい」という気持ちが生まれてきました。その気持ちはこれからもずっと大切にしていきたいです。

そして三つ目は、生活指導に関して。このことについては、実習前はあまり考えていませんでした。しかし実際に、挨拶や服装について熱心に指導しておられる先生方を見て、生活指導は学校生活の基本であり、大切にしなければならないと感じました。

正直、実習前は、どうやって生徒たちと関わろうか、40 人の生徒を前に上手く喋れるか、など、本当に不安で仕方ありませんでした。実際に実習に行き、やはり分からないことはたくさんで、悩むこともありました。しかし、担当の先生や、生徒たちに支えられて、本当に充実した三週間を送ることができました。「予習してきてよ！」と言ったら、「しゃあなし、先生の授業やからやってくるわ！」、「先生の授業楽しいよ！」と言ってくれる、そんな生徒たちがいるから、「次はもっと頑張ろう」、という気持ちになれました。そうやって自分が頑張れば生徒もついてきてくれる。私は、そこが教師という仕事の魅力ではないかと思います。今回の実習では、大学の授業では学ぶことができないことを、たくさん体験し、習得することができました。一人でも、英語が楽しい、英語が好き、そう思ってくれる生徒が増えるような授業をする、ということが私の目標です。実習で感じた、まだまだな部分を踏まえ、これからも目標に向かって頑張りたいと思います。

教育実習を終えて

史学科　４回生

５月 25 日から６月 12 日までの３週間教育実習を母校でさせていただきました。

実習前は不安ばかりでしたが、実際に実習が始まるとしなければならない事が大変多く、それに集中していき不安よりもやらなければならないという感情が湧きました。

主な実習内容はクラス、指導案作成、社会科の授業、生徒一人一人の生活日記のコメント記入など、現職の先生方がされている仕事内容の一部です。指導案の作成は大学の講義の中で練習し模擬授業をしていきました。その中で「生徒にとっては取り返すことのできない１時間」を担当することの責任が教育実習生にはあるということ学びましたが、自分がその立場となり実際に教壇に立つことで実感しました。授業後には担当の先生と反省を行い、次のクラスの時には改善していくことになりますが、最初の単元が当たるクラスの時でもベストな内容を生徒に伝えることが出来るように準備をしなくてはならないのですが、それができるようになるまで時間がかかりました。また、板書計画や時間配分など準備して授業にのぞみましたが、時間配分がずれることがありました。それは、時間配分の中に生徒自身に考えさせる時間が足りなかったためでした。わかってもらいたいことを説明するだけではなく、生徒自身に気づかせる･考えさせる時間の確保など経験していくことで身につくことだと教えていただきました。さらに、生徒に興味を持ってもらうためにも模型を使って説明する、資料集から読み取り表を作成する時間を設けることで授業に集中してくれたように思います。

実習は授業だけではありません。担当クラスの生徒の状況を把握して指導することも大切なことです。緊張してしまい生徒との距離がなかなか掴むことができない私に、一人の生徒が積極的に話しかけてくれたことが今でも忘れられないです。また、先生の仕事は生徒が休憩の時間でも教室や校庭、廊下といったように様々な場所で行なわれていました。常に生徒の動きを見て何かあれば適切な生徒指導をされていました。その先生方の仕事内容を見ていると生徒一人一人の特徴を把握し指導されていると感じました。

また､授業実習の中で道徳も担当させていただきましたが､３週間の中の指導案で一番悩むことが多く、先生方の協力を得て授業という形にすることができました。答えを見つけるのではなく、自分と向き合う時間でありそれを促す質問を考えるのが大変でした。なぜ、どうして、という考えから自分ならこうする、これからはこうしたいという感情まで高めていかなくてはならい道徳はとても難しかったです。

生徒と関わりを持つという貴重な体験を今回の教育実習ですることができたと思います。学ぶことが多かった教育実習ですが、教育実習でなければ体験することが出来ないことばかりでした。３週間という短い時間でしたが、生徒達が心を込めて歌を歌ってくれたり、メッセージをくれたりしてくれたことは私の一生の宝物となりました。

生徒のことを第一に考え、生徒の成長を見守るという先生方の姿勢を参考にしていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

たった４週間という短い期間でしたが、本当に多くのことを学ぶことができた実習でした。

よい教師の資質として、「子どもたちに対する愛情」、「高い専門性」、それらを支える「人間性」がよく挙げられます。当然のことですが、この教育実習で「高い専門性」の必要を痛感しました。

特に、子どもたちの発達段階に合わせた授業の構成や発問の仕方にはよく悩まされました。そこで、これらの問題を少しでも解決するためには、やはり教材研究が大切だと実感しました。また、「高い専門性」は教材研究から生まれるものだと思いました。

教材研究がしっかりと行えた授業は、自分の心にゆとりができ、落ち着いて授業が行えます。しかし、少しでも怠れば、子どもたちに伝えたいことがちっとも伝わらないのです。私は一度、道徳の授業を行いました。自分ではしっかり教材研究を行ったつもりで授業に臨みましたが、子どもたちからはほとんど意見が出ず､結局 25 分ほどしか授業が行えませんでした。「なぜ？」「ちゃんと教材研究したのに･･･」と悔しくて涙が止まらなかったのを覚えています。しかし、自分でちゃんと行ったつもりの教材研究は所詮、行った「つもり」で、よく考えれば、教師の目線からでしか教材研究が行えていなかったのです。授業の主人公は子どもたちだということを忘れていた気がします。道徳の授業の失敗で、教師の目線から、子どもたちの目線から、様々な方向から教材を見つめることで、よい授業が生まれることが分りました。

授業は目的があって、内容があって、方法があります。方法ばかりが先んじてしまっては内容がとぼしいものになりがちだと思いますし、内容が豊かでも目的にそぐわなければ、やはりよい授業とは言えないと思います。よい授業とは教材研究の上に成り立つものだとよく分りました。

そして、教育実習で「絶対に教師になりたい！！」という強い思いを得ることができました。私のつたない授業にも頑張ってついてきてくれた子どもたち、苦手な鉄棒に毎日向う子ども、自分のことを認めてもらえた時のキラキラとした表情、友達関係に悩んでいた子ども、様々な子どもと毎日過ごすにつれて少しでもみんなの力になりたい、少しでもよい影響が与えられる人間になりたいと思いました。

教育実習で学んだことは一生の宝物です。大切にあたためて、子どもとともに歩んでいける教師になりたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

私は、大学附属の幼稚園で教育実習をさせていただきました。附属幼稚園での実習は私達の学年が初の試みであったため、実習のスタート時には実習生だけでなく、幼稚園の先生方や大学の先生方にも戸惑いがあったことと思います。１回の実習に実習生３人が入ること、３週間に１度の実習を１年通して行なうこと。私も不安を抱えながらのスタートでしたが、長い道のりだと思っていた１年間はとても充実したものとなりました。

初めて「先生」と呼ばれた時、嬉しさと同時に緊張が背中を走ったことを今でも覚えています。実習生とはいえ自分が子ども達にとっての“先生”になったのだと、責任の重さを感じたからです。その責任を意識しすぎて「しっかりしなければ」と思うあまり、保育では緊張して思うように言葉が出てこなかったり、指導案通りに進めることが出来なかったりする日々が続きました。その頃の私は、焦りやもどかしさから、どんな先生でどんな保育方法が正しいのか、と正解を探して迷子になっていたように思います。

魚の形を描いてハサミで切る、という制作をしていた時のことです。魚の形が分からない、という子どもが何人かいました。私は､どの子どもに対しても「先生が魚の形を描くから､その上をなぞって切ってね」と言い、画用紙に鉛筆で魚の形を書きました。その日の反省会で､「出来ないことを出来るようにするための準備を一人一人の出来ること（発達）に合わせてすれば、出来なかった子どもも劣等感や引け目を感じずに楽しく作業が出来るようになるよ」と先生から指導がありました。そして、見本を見れば自分の力で描くことが出来る子どもには写真や絵を用意し、なぞって描くことが出来る子どもには画用紙に爪で薄く跡をつけている､という先生の保育方法を教えていただきました｡その日の指導をきっかけに、先生の姿を目で追うようになりました。大学の授業でも一人一人に合わせた保育について学んでいましたが、実際に保育をしている先生の姿は私にとって何よりの教科書でした。先生は、発達だけでなく性格や家庭環境などを含めた子どもの姿を捉え、素直な気持ちを言葉や行動で伝えていました。そんな先生を深く信頼し、いつも明るく元気な子ども達を見る度に、私も先生のような“先生”になりたいと強く感じました。

どんな先生でどんな保育方法が正しいのか、その問いに正解があるのなら、私にはまだ分かりません。しかし、今回の実習を担当してくださった先生のように、子ども達の姿を見守りながら１人１人に合わせた保育をしていきたいです。保育の正解は１つではないこと、これが私にとっての正解であり、自分の進むべき道を示してくれる指針のように感じています。１年間で心も体も大きく成長した子ども達と一緒に、私自身も様々なことを学んだ１年となりました。学んだことを胸に刻み、これからも日々努力を続けていきます。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

教育実習を行ったことによって、私は自分の力量の現状と弱点や課題を実践的に気付くことと共に、指導の工夫の仕方を学ぶことができました。教育実習に行くまで私は、できるかぎり指導力をつけて実習を終えたいという想いをもっていました。しかし、この短期間で教える技術を身に付けるということは難しいという指導教官の先生の言葉から、実習では、子どもたちとたくさん関わることと、教壇に立って子どもの前で落ち着いて話すことができるようになることの二つを目標にしました。やはり、どんなことでも目標をもって取り組むことで、多くのことに気付くことができると思います。

一つ目の、子どもたちとたくさん関わることでは、配属されたクラスの子どもだけでなく、他のクラス、他の学年の子どもたちにも声をかけていきました。クラスに子どもに毎日声をかけていると、その子の性格や特徴が少しずつ見えてきて、家庭での様子もわかるようになりました。すると、気になる子どもも見えてくるわけで、私が配属されたのは一年生でしたが、次第に虐待を受けている疑いのある子どももいました。給食のナプキンやお箸を持って帰っても洗ってくれないために毎日同じものを使っていたり、クレヨンや色鉛筆などが使えないような状態であったり、怪我をさせられたりしていました。このことで気付かされたことは、ネグレクトを受けている子どもは、周りの子どもから嫌がられがちであるということです。一年生でも、汚いや不潔といって、そのような目でその子を見るようになっていました。教師は、保護者と話し合う必要性は、子どもを保護者から守ることだけでなく、周りの子どもから守ることにもあると分かりました。

二つ目の、教壇に立って子どもの前で落ち着いて話すことは、授業をする中で心がけました。落ち着くことはできても、子どもに伝わるように話すには、話し方や話す順序の工夫が必要でした。また、一斉授業の難しさを実感させられました。クラスには必ず授業についていくことができない児童がいますが、そのような児童への個別支援は簡単ですが、授業をしながら支援することが難しかったです。全体に目を向けていなければならない時に遅れているなど気付いても、その児童のところへ行って教えれば、他の児童の学習が止まってしまいます。一年生で平仮名もカタカナも書けないとなれば、一層考えさせられました。そのような状況への対応として、私の指導教官の先生は、放課後学習を行ったり、できることは朝のうちにし、子どもたちができることはさせたりすることで、個別に指導できる時間を作っていました。

教育実習は短期間ですが、その間にも子どもの成長やつまずきなど、たくさんの子どもの変化や姿を見ることができました。たった４週間で子どもは変化していくので、その子どもたちを指導する教師の影響はとても大きいものだと実感しました。だから、教師は教育目的を明確にもって、目的達成まで継続して指導していくことが大切だと思います。担任になれば、一年間子どもたちを指導していくので、私はこのようなことを念頭において、努めようと考えています。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

「先生おはようございます。」

先生と言われることに嬉しさと責任を感じながら、教育実習が始まりました。実習先の小学校は、佐賀県にある私の母校です。1000 人ちかくの児童が在籍するマンモス校で実習をさせていただくことになりました。

教育実習で学んだことは３つあります。

１つ目は、「子どもに考えさせる」ことです。

担任の先生の指導を見させて頂いた時、私は自分のある失敗に気付きました。それは、子どものためと思い、ああしたらどうか、こうしたらどうかと指示をしたり、子どもが言いたいことをこちらが先回りして言ったりしていたことです。先生は子どもに、「今は、何をする時間か」「作業に必要な時間はどれくらいか」「何が必要か」など、考えさせるような問いかけをされていました。子どもは指示がなくても、考え行動することができるという当たり前のことに私は気付いていませんでした。子どもが考えることができるような言葉がけの工夫、そして、子どもが考えるのをじっくり待ち、見守ることが大切であることを学びました。

２つ目は、教材研究についてです。

子どもにとって分かる授業、楽しい授業、ためになる授業になるカギは、教材研究にあると感じました。導入でどのような教材を取り扱えば子どもたちが興味をもって取り組むだろう、何か楽しい題材はないか、など考えながら教材研究をすることが大事であると教えて頂きました。また、計画通りにいかなくても、臨機応変に対応できるよう、幅広い知識を身につけておくことが大切であるということを学びました。

３つ目は、子どもといる時間を大切にすることです。

休み時間、私は子どもたちと一緒に遊びました。子どもと話をしたりゲームをしたりする中で、授業中だけでは分らない、友人関係、子どもの興味があること、子どもたちの中で流行っていることなど、子どもの様子が分かりました。

予想以上に忙しい毎日でしたが、時間を見つけ、子どもと一緒に過ごす中で、授業以外でも、お互いの信頼関係を育てていくことができることを学びました。

優しく厳しい先生方にご指導頂いたこと、４年１組 39 人の元気いっぱいな子どもたちに支えられ、助けられながら過ごした１か月は、私の一生の宝です。

教育実習で学んだことを胸に刻み、子どもと共に成長できる教師になれるよう、努力していきます。

教育実習を通して

教育学科　４回生

私は、子どもたちへの愛情が溢れており、いつも笑顔で子どもたちとかかわっておられる先生にご指導をいただきました。担当させていただいたクラスの子どもたちは仲が良く、笑顔の絶えない元気なクラスでした。教育実習は、他学では４週間を連続で行うと聞いたことがありますが、１年間にわたる子どもの成長や発達について直接学ぶことができ、たいへん実りの多いものとなりました。実習で学んだことの中で、最も印象に残っていることについてまとめたいと思います。

まず、「子どもたちの主体的に楽しむことのできる生活づくり」の大切さについて学ぶことができました。実習に入るまで、私は子どもたちが楽しむ生活は多くの場合、教師が細かく設定し、つくっていくものだと思っていました。しかし、実際には、子どもたちが楽しむ生活は、教師だけで考え、設定し、展開していくことはできません。子どもたちと教師が共に、言葉を交わし、保育を展開していくことで、初めて子どもたちが楽しむことのできる生活となります。つまり、園生活や保育での子どもたちと教師のコミュニケーションは、子どもたちが主体的に楽しむ生活の基盤を支えるものとなっているように思われました。また、それらの生活は、子どもたちと教師の思いが一つになり、共につくっていくことによって初めてつくられていくことに気付きました。

次に、「子どもたちとのコミュニケーションの大切さ」についてです。園生活は、子どもたちが周囲の人やものとのコミュニケーションによってほとんど成立しています。しかし、子どもたちとコミュニケーションを図ることについては､その難しさに実習中とても悩みました。部分実習や１日実習の中で、１つの言葉がけを考え、自分の中で子どもたちの反応を予想していても、子どもたちの反応は１つではありません。その中で、どのように保育などを展開していけばいいのか、また子どもたちにわかりやすくものごとを伝えらえているのだろうかと悩んだことも多々ありました。子どもたちとかかわっていく中で、子どもたちの言葉を受容し、応えていくことが少しずつできるようになりました。子どもたちとのかかわりの難しさから「どうすればいいのだろう」と次第に自分が考え取り組むことで、課題が明確になり、その結果、僅かですが成果が実感できた喜びを感じました。

このように自分なりに充実した教育実習を通して、保育の難しさを実感することができ、また保育を展開する楽しさに気付くことができました。保育は、教師や子どもたちだけで展開していくものでもありません。保育は、教師のねらいを大切にしながらも、子どもたちと教師が共にかかわり、楽しんでいくものだと感じました。そのために、教師の言葉かけの一つ一つや、何気ない働きかけ、環境や雰囲気などの大切さを実感し、教師という仕事の魅力を改めて強く感じるとともに、その職責の重大さも感じました。子どもたちの将来を見据え、生涯を楽しんで生きていくことのできる力を育んでいくために、一人ひとりを受け止め、子どもたちの思いに寄り添いながら、母親のような身近な存在でありたいと思います。

幼稚園インターンシップを通して

教育学科　３回生

私は幼児教育について勉強しています。実際に子どもたちと共に活動する中で、幼稚園の様子を直に感じたいという理由で２回生の時に初めて幼稚園インターンシップに申し込みました。それまでに何度かボランティアとして他の幼稚園に体験に行ったことがありましたが、オリエンテーションや手続きを経て担当園に伺うのは初めてのことでした。

当時は教育実習も経験したことがなく、ひとつひとつの手順が分からず、とても不安だったことを覚えています。しかし、実際に３回生になって教育実習を行う際には、全ての手続きや事務作業を自己責任で行わなくてはなりません。インターンシップに行ったことで、周りの学生よりは冷静になって実習の準備ができました。

インターンシップを通じて学んだことがたくさんあります。

１つめに、園の考え方やシステムは、施設ごとによって本当に違うのだということです。施設の大きさや子どもや保育者の人数はもちろんのこと、同じような保育をする際にも指導方法の違いや子どもと関わる姿勢など様々な違いがありました。それぞれの園に素晴らしいところがあり、またその一方で課題があり、自分が行いたい教育はどのような形なのかということを考えるきっかけになりました。また自分の理想とする保育をもち、子どもと共に作り上げていくことが大切だと思いました。

２つめに、自分自身のチャレンジになるということです。インターンシップは自分でやってみたいことを選べる制度になっており、私は設定保育をさせて頂くことができました。たくさんの先生方からアドバイスを頂き、大変勉強になりました。他にも送迎バスの付き添いや職員会議に同行させていただき、ボランティアだけでは経験できなかったことに自分の意思も伝えながらチャレンジできました。自分のやってみたいことなので、より意欲的に取り組める、得るものも大きかったと思っています。

３つめに先生方の思いを知ることができました。インターンシップの期間中、実際に幼稚園職員の方と話をする機会がたくさんありました。自分の目指している職業に就いている方と話ができることで、この仕事の魅力や苦労などを直に感じることができました。現場で働く先生方は笑顔で子どもと関わりつつも、叱らなければいけない時はメリハリをつけて子どもと向き合っていました。先生は一人ひとりの性格や友だち同士の関わりなど、私たちの思っている以上に子どものことを見ており、保育者というのは視野を広く持たなくてはならないのだと思いました。

最後に子どもの素直さや一生懸命さに感動を覚え、やはりこの職業につきたいという気持ちが強くなったことが何よりの収穫ではないかと思います。教育者としての大変な裏側を知っても子どもに教えてもらえることもたくさんあり、子どもと共に成長していけることがこの職業の良いところだと改めて感じました。子どもとの関わりの中で生まれた、「もっと知りたい」という意欲や経験を今後にいかして、自分らしい保育ができるよう成長していきたいです。

教育実習を終えて

家政学科　４回生

私は母校の私立高校で三週間の教育実習を行いました。

事前指導では、担当クラスの名簿・どの単元を何クラスに授業するかなどを聞いていたので、実習の際に教材研究と授業だけに時間を費やしてしまわないよう、実習が始まる前の期間では、しっかりと知識を詰め込んで実習に挑みました。大学には沢山資料もあるので、先生にもアドバイスを頂きながら指導案、ワークシートの制作をしていました。

実習をする前に、私は２つの目標を立てました。１つはクラス全員の顔と名前を覚え、１人１人の長所を見つけること、もうひとつは大学では知識や教養を学んでいましたが、教育実習ではその実践として教育現場をしっかり肌で感じること、としました。

私の担当したクラスは高校２年生の女子 26 名の看護科コースでしたが、とても元気な子が多く、進路についてしっかり考えている子が大半でとても感心しました。

私の授業は２週目から始まり、高校２年生５クラスと３年生食物選択２クラスに計 14 時間授業を行いました。同じ内容の授業を行っても、クラスごとに生徒の反応が全然違うので授業しやすいクラス、しにくいクラス、それによって進み具合も変わり、戸惑うこともありました。授業が終わればその日の反省を担当の先生に指導して頂いたので､それを次回の課題とし､回数を重ねるごとに授業が上手くなっている手ごたえを感じることが出来ました。しかし、生徒は授業を１回しか聞けないので、上手い下手など授業に差があってはいけないということを反省しました。次からはもう一人前の教師として教壇に立たねばなりません。生徒の質問や発言を上手く引き出してこそよい授業が出来るので、わたしの今後の課題となりました。

教育実習を通して思ったことは、生徒は思っている以上に先生のことを見ているということです。その分、教師がしっかりしていれば必ず生徒は答えてくれるということ。いい加減な気持ちや、自信のない気持ちはすぐに生徒に見抜かれてしまいます。

私の目標の１つであった、生徒の長所を見つけるという課題は、日々の生活と授業、そして行事を重ねて発見していきました。競技大会を通してクラスが一体になり、一緒に喜び、悔しがり、生徒の色んな一面を見ることができました｡こういった体験ができるのも教師という仕事の醍醐味だと感じました。最後の日には生徒に１人ずつ、長所と一言を書いた手紙を書きました。その他にも、放課後の職員研修やテスト監督、クラブ見学など、教師という仕事についてはまだほんの一部にすぎませんが本当に色々なことを学ばせていただいた３週間でした。

担当の先生に指導して頂いた、「自分の教師像をぶれないようにすること。」この事を常に頭に置き、教育実習で学んだことを生かして、生徒と共に日々成長出来るような教師になりたいと思います。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程４回生

私は母校ではなく、教育委員会の方で指定していただいた小学校で一週間（６月）教育実習を行いました。学級数 20 学級、児童数 546 名（家庭数 422 戸）の一学年３クラス程の規模の学校でした。給食は自校式で、近隣の２つの幼稚園の給食も一緒に作っていました。幸運なことに、こちらの小学校には栄養教諭の先生がいらっしゃいました。

今回の実習では、６年３組を担当させていただきましたが、そのクラスの子どもたちとは給食を食べる時と掃除時間だけ関わりがある程度で、他の学年の授業参観をさせていただいたり、調理室での業務や放課後の調理員さんとのミーティングに参加させていただいたりしました。また、給食の配膳時と返却時には給食室で子どもたちの補助や、残飯チェック等もしていました。自校給食ということもあり、子ども達は「ごちそうさまでした。美味しかったです。」と元気に挨拶できており、その姿を見てとても嬉しく思いました。

栄養教諭の先生の授業も見せていただけました。私は６年生に授業をすることが決まっていたので、違う学年でという先生のご配慮で１年生への学活の時間における食育を見せていただきました。小学校に入学したばかりで文字の読み書きも未だならないということで、紙芝居や食事カードを媒体に使用しておりました。媒体の使い方や声の大きさ・アクセント、黒板の使い方等とても勉強になりました。
私の研究授業はというと、６年３組の家庭科の時間で２時間授業をしました。事前に指導案を作成しＰ．Ｐ．も作っていましたが、教育実習が始まってから訂正が入り授業の準備が間に合わず、授業当日ギリギリに指導案や子どもたちに配るプリントが完成というあるまじき行為をしてしまいました。そのため、校長先生をはじめ多くの先生方に大変ご迷惑をかけてしまいました。特に６年３組の担任の先生には…授業でＰ．Ｐ．を使用することを伝えておらず、他の先生に子どもたちをお願いし私の準備に付き合っていただき感謝しきれません。先生方のサポートがあったおかげで、授業はうまくいきました。授業後の反省会では、黒板の文字の大きさや色や枠の使い方、Ｐ．Ｐ．の活用の仕方、45 分の時間の使い方等たくさんのことをご指導いただきました。

一週間という短い期間ではありましたが、全校朝会や避難訓練、県の教育委員会による研究授業（英語）等なかなかできない体験もさせていただくことができました。研究授業を実際にさせていただき、授業の準備の大切さを痛いほど感じました。最低でも前日までに指導案をはじめ、授業で使用する媒体やワークシートを完成させ、担当の先生に確認していただくこと、そして、実際に使用する教室で模擬授業をすることで授業の流れを体で覚え、黒板の使い方等を確認することが大切だと気づくことが出来ました。

教育実習を終えて

健康福祉学科　４回生

私は二週間、母校である高校の健康福祉コースにて、教育実習を経験させていただきました。

不安以上に楽しみが大きかった私にとって、はじめの一週間は非常に苦しいものでした。初めての授業では黒板の字が小さく、見えづらいこと、生徒が書く必要のある言葉がまとめられてないこと、教室の後ろまで声が届いていないこと､そしてまだまだ教材研究が足りていないことを注意されました｡思った以上に課題が多く、悔しい思いをしました。時間の使い方も上手にできず、組んだ予定通りに一日が進まない状況でした。

生徒に覚えてほしいこと、知っておいてほしいこと、感じてほしいことが自分の頭の中にはあるものの、それを整理し、構成し、授業として出すことがこんなにも難しいのだと実感しました。ただ暗記するのではなく、イメージし、理解をしてほしい。指導案を作っているときは、特にそのことを意識していました。生徒がより分かりやすいように例を挙げたり、質問してみたり、絵や写真を用いたりと色々工夫してみました。しかし一つのことにこだわり過ぎると授業が進行せず、予定通りに終わらないという問題にも気付きました。50 分という短い時間を使って、より内容の濃い授業にと努めました。

始めは『授業』と呼ぶにも至らないものでしたが、担当教員の先生からは『日々の成長が目に見えて分かり、感心した。最後の研究授業は非常に良かった』と言っていただき、他の先生方からも研究授業に対してうれしい評価をいただきました。

実習期間中はちょうど文化祭を控えており、放課後、HR の時間には担当クラスの練習に参加させていただきました。１年生で、入学してまだ２か月ということもあり、お互い探り探りの話し合いの仕方や、自分勝手な行動をしてしまう生徒も少しおり、クラス担任としての役割もいろいろと試行錯誤しました。２週間では１人１人の生徒を見ることができず、自分のなかでやり残したことがたくさんあるように思います。

正直、もっと生徒とのコミュニケーションをとる時間や部活動に参加できる時間がとれるものだと思っていましたが、実際には寝る時間さえもまともにとれない２週間でした。

毎日緊張していて、息がつまりそうな思いと、体力保持の戦いの中で、私の心の支えは生徒たちがかけてくれる言葉でした。まともな授業もできず、迷惑かけっぱなしだったにも関わらず、最終日には授業を担当した３クラスから寄せ書きと花束をいただき、胸がいっぱいになりました。

生徒たちが教えてくれたことを胸に、夢に向かってがんばっていきたいと思います。

観察実習レポート

教育学科　４回生

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの。

４年生の普通学級にいるダウン症児と過ごす時間が多くありました。昨年も、なかよし学級に何回か入らせてもらったため、障がいを持った子どもと関わることは初めてではありませんでした。しかし私は、ダウン症という病気のことは、名前を聞いたことがあるというくらいで、どういった症状なのか、原因は何か、という知識が全くないことに気付かされました。このことがきっかけで、家でインターネット等でダウン症について調べました。今後自分が教師になった際、自分のクラスに障がいをもつ子どもがいる可能性は多いにあります。スクールサポーターの活動がなければ、教師になる前に、そういった子どものことを知ろうと思わなかったと思います。そして何より、その子どもと関わる中で、ダウン症児は皆同じではなく、一人一人個性がある（個人差がある）ということを学びました。教師になる前に、本当によい経験ができました。

また、担任の先生だけでなく、学校全体として、その子どものことを気にかけていたり、皆で共通理解されていました。一体となって支援している姿を見て、学校のチームワークは必要だと感じました。

２．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

自分のクラスに障がいをもつ子どもがいたらどうするか、ということをスクールサポーターの活動を通して考えるきっかけになりました。そして、その場合、一人で考えたり、決めるのではなくまわりの人の意見に耳を傾けることの大切さに気付かされました。

算数の時間は、ダウン症児のみ別のﾌﾟﾘﾝﾄを学習していました。私はその横について補助するという活動でした。ﾌﾟﾘﾝﾄ内容は４年生にも関わらず、「たし算・ひき算」です。通常の４年生算数授業の中、その子どもだけﾌﾟﾘﾝﾄ学習でした。しかも、数の分解を理解していないまま、１桁と２桁のたし算をおはじきを使って計算していました。５＋５＝１０とすぐ答えが出てこず、おはじきを使って１から数えないと答えが出ないのです。また、1～10を逆から言えないことも分かりました。このようなことから、ただ計算のﾌﾟﾘﾝﾄをしても、その意味を理解していないのではないかと思いました。ただ教えられた処理をしているにすぎないように感じたのです。担任は一人なので、なかなか手が回らない状況も肌で感じました。だから、なかよし学級で個々に学習したほうが、その子どもにとってよいと思いました。

しかし、そのような私の考えには保護者の思いがふくまれていないことに気付かされました。子どもに対する保護者の思いや願いは必ずあります。それを踏まえて教育活動をすることの大切さを学びました。教師をする前に、このことに気付かされただけでも、よい経験だったと思います。将来、自分のクラスに障がいをもった子どもがいても、うろたえず、保護者との連携を大切にしていきたいと思います。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題、改善点・アドバイス。

私のお世話になった学校では、活動報告書の指導事項、感想等の欄には教頭先生が書いて下さっていました。しかし、友人に聞いたところ、学校によっては、別紙に担任からスクールサポーターあてにメッセージを書いていただいているようです。私は、時間の関係等で担任の先生とあまりお話する機会が少なかったため、このような文筆でのやりとりはとてもいいなと思いました。先生方はお忙しい中大変ではありますが、スクールサポーターとのコミュニケーションをもっと深くすれば、より良い活動になると思います。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？その理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？その理由を記述してください。

上で述べたように、スクールサポーターとして学校現場に関わることは、将来教師となるにあたってとても良い経験になると思います。実際の先生方の姿や子どもを見て、自分だったら…と自然に考えるようになると思います。採用試験では必ず､｢もしこういう児童がいたらどうしますか？｣と必ずといっていいくらい面接で聞かれます。スクールサポーターでの経験はそういったことをイメージしやすくしてくれることは間違いないです。面接対策だけでなく、実際に教壇に立って、おどおどしないためにも、少しずつ自分の先生像をつくっていくことは、教師になるための準備であると思います。そのためには実際に子どもや先生と関わることは、スクールサポーターでしかできないと考えます。

５．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

ダウン症児の算数学習に疑問を感じ、「１～10を逆から言う練習」が必要だという自分の考えを活動報告書に書いたところ、教頭先生から、「とても良いアイディアですね」とお褒めの言葉をいただき、嬉しく感じました。教える立場のものが、柔軟な考え方ができることは大変大切なことだということを学びました。もっと視野を広くもって、たくさん工夫できる教師になりたいと思いました。

私が教頭先生に褒められて、嬉しく感じたのだから、子どもだともっともっと嬉しく感じるのだと思いました。子どもの良いところを様々な角度から見つけられる教師を目指したいです。

観察実習レポート

教育学科　４回生

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの。

今年は、昨年サポーターとして活動させていただいた学年に継続して関わらせていただきました。後期からの活動のため、半年ほど子どもたちに会っていなかったので、初日がとても楽しみでした。緊張しながら学校へ行くと、登校中の子どもたちが駆け寄ってきてくれて、「先生久しぶり！」「なんで今までこんかったん？」と喜んでくれて、本当に可愛く思ったし、短い期間だけれど精一杯活動してたくさん学ぶぞ！と思いました。

子どもたちは２年生になっていて、昨年までと違って少しお兄さんお姉さんになっていました。一番子どもたちの成長を感じたことは、もめごとやけんかが明らかに少なくなっていることでした。１年生のころは、ちょっとしたことで腹を立て口げんかをしたり、手を出してしまっていたのに、ちょっとしたことはお互いに許し合えたり、私が介入する前に友達が間に入って解決していたり、本当に子どもたちは日々成長しているのだな、ということを強く感じました。休み時間も、今までは私が一緒に遊んで、ルールを決めたり問題が起きた時に解決したりしていたのに、今では自分たちで遊びを楽しみ、自分たちで何とかする力を身につけていました。驚いたと同時に、子どもたちの立派な成長やたくましさを感じました。すぐに口を出してしまって私が解決することは簡単だけれど、子どもの成長を信じてじっと見守ることが、子どもたちのために大切だということがよくわかりました。

先生方からも、今年もたくさんのことを勉強させていただきました。子どもたちの興味・関心をうまく引き出し、予想をたてさせたり自分の考えを伝えたり人の意見を聞いたりと、「考える力」を子どもに身につけさせることはとても大切だと私は考えているので、とても参考になりました。私も教師になった際には、学んだことをいかしながら、「考える力」を子どもたちに教えられるような授業や取り組みをしたいと思いました。

運動会や音楽会など、様々な行事にも参加させていただきました。学校という組織は、子ども・教師・保護者・地域の方すべての関係がよく、信頼関係が築けていないとうまく成り立たないのだと思いました。お互いを信じ、助け合うこと、真剣に向き合うことが大切だと学びました。

２．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか？

将来教師になった時、行き詰ったり壁にぶつかったりすることがあると思います。その時に、学生時代の、教師でもなく児童でもない立場から双方を見つめていたころのことを思い出したいです。児童の立場にたって考えたり、教師の気持ちになって考えたりすることで、様々な困難を乗り越えていきたいと思います。また、活動を通して子どもの無限の可能性や能力を目の当たりにしたので、それらを信じ、子どもたちを信じる気持ちを貫いていきたいと思います。

さらに、先生が実践されていたことで「良いな、面白いな」と思ったことに、自分なりに工夫を加え、

自分だけのオリジナルな教育法を、この経験を生かして少しずつ確立していきたいと思います。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題、改善点・アドバイスがあれば記述してください。

活動と学業の両立は、時間割がうまく合うならば十分可能だと思います。特に４回生になると授業も少なくなるので、無理せずに活動に専念することができると思います。

しかし、先生方が忙しいのは変わらないので、先生方との交流や、指導を仰ぐ時間が限られていることが少しもったいなく感じます。活動の中で、疑問や悩むことはたくさん生まれるので、それを解決するための、教えていただくための機会がもう少しあると、もっと多くのことが学べるだろうと思いました。自分ではわからないことでも、客観的に、しかも現役の先生方から見ればすぐにわかることもあると思います。いろんな考え方を知ることで､柔軟に物事をとらえることができるようになると思います。しかし、先生方も自身の仕事が多忙なため迷惑になりかねないので、自分でよく観察して学んだり、時間を考えつつ質問や指導を請うたりすることが大切だと思いまいた。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？その理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？その理由を記述してください。

私は、スクールサポーターの活動を通して、教師という仕事の魅力を改めて感じることができました。学生の時に小学校の生活の中に入り、子どもの目線、教師の目線で学校を見つめることができる機会は、本当に貴重で大切だと思います。机上での学習だけではわからないことも多いので、実際に先生方の指導や関わり方をそばで見ることで、これからの自分にとって絶対にプラスになる経験ができると参加してみて強く感じました｡だからといって机上の学習をおろそかにしてしまうようならばいけないけれど、週に１回ほどなので、自分が今まで学習してきた技術や考えを実践し、向上する良い刺激にもなると思います。何より子どもたちと触れ合うことができるし、こういった経験をすることで、教員採用試験の面接の際、具体的な考えや意見を述べることができました。本当にいい勉強をさせていただきました。

５．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

今年は、運動会と音楽会に参加させていただきました。どちらも練習･本番ともに見ていたのですが、練習の時の子どもたちの頑張り、先生方の指導の大変さ、本番での緊張感と達成感を一緒に味わうことができました。

特に音楽会は、昨年も見に行って感動したのですが、今年も本当に素敵だと思いました。子どもたちの演奏はもちろん素晴らしく、「本当に小学生かな」と思うような演奏と歌でした。一生懸命なだけではなく、子どもたち自身が音楽を楽しんでいて、休み時間もずっと歌を口ずさんでいました。そして先生方だけの演奏もあり、児童・先生がともに心から音楽を楽しんで作られた音楽会でした。私も教師になったら、こんなに心に響く音楽会を行っていけたらいいな、と思いました。

６．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

活動の間、私はずっと同じ学年に参加させていただきました。なので、今振り返ってみるとその成長ぶりに感動しました。あっという間の短い期間だったのに、子どもたちはあれもこれもできるようになり、外見だけでなく、心も著しい成長を遂げたと思います。きっと、これからもどんどん成長していくのだろうな、どんな６年生になるのかな、と思うととても楽しみに感じたし、その成長を見ることができないことを残念に思いました。

子どもの持つ可能性やパワー、能力などの多くの力を実感し、充実した活動を行うことができました。この小学校で、たくさんの素敵な子どもたちと先生方に出逢えて、本当によかったと心から思っています。

観察実習レポート

教育学科　４回生

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの。

私はスクールサポーターの活動を通して、若い先生としての在り方を学びました。授業の補助ということはわかっていても、「どの程度声をかけたらよいのか」ずっと悩んでいました。事前に担当の先生と打ち合わせができれば一番よいのですが、毎回そういうわけにもいかず、授業中に困っている児童にすぐに声をかけて助言してしまうということが前期には多かったように思います。秋に教育実習を終えて、授業はただ単元をこなすだけではなく教師の意図的・計画的な指導があってこそ成り立つものであるということを強く感じました。そしてそれまでの自分の児童への接し方が意図的なものではなくその場しのぎで、非常に甘いものであったことに気づきました。

授業をされる先生にしてみれば「そこは児童に考えさせたいところ」「この子はいつも人の話を聞かないから自分で解決方法を見つけるまでは見守っておこう」などさまざまな思いがあり意図的・計画的な授業をされていたと思います。そのような思いに気づかず私は自分の仕事ばかりしていました。その思いを担任の先生にお伝えすると「もし、竹内先生が毎日学校に勤務されている先生ならばちょっと…とは思うけど、週に１回限られた日しか来られないから、子どもたちも先生と話しをしたいんだと思います。子どもたちも先生のこと楽しみにしているので、今の範囲では大丈夫ですよ。本当にやめてほしいときは言いますから。」とアドバイスしていただきました。そのときにそこまで私の立場を考慮してくださっていることにとても感激しました。

私はサポーターとしてもっと考えて行動しなければならないと感じました。また、別の先生からは「もっと子どもと感情を共有したらいい。楽しいときは思いっきり笑ったらいいよ。でも、怒るときはメリハリをつけてビシっと叱る。そのギャップが子どもたちによく響く。それは僕たちではできないことで、若い女の先生の特権だと思うよ。」とアドバイスをいただきました。私は、その場の学校や状況に合わせて自分を造っていましたが､そこに自分の意思は共存していなかったことに気づきました。「自分はこういう先生でいたい。」という意思を持った上で、児童と関わることの大切さを改めて感じることができました。そうすることで、自分の考えの軸もぶれずに筋の通った指導や教育ができるようになるのではないかと思います。

２．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

スクールサポーターでは、授業の展開の仕方、児童との関わり方、教師としての在り方を学びました。授業の方法としては、算数などの理解度の差が大きいものは習熟度別に授業を展開したり、サブの先生と事前に話し合ったりすることが大切であると学びました。どうしても理解できない児童には「最低限ここは押さえる」という線引きをもつことも大切であると思いました。そのような方法を授業に生かせていきたいと思います。また、休憩時間や自分の仕事に余裕があるときは児童と一緒に遊びたいと思い

ます。名倉小学校では、休憩時間に児童と一緒に遊んでいる先生方が多くいらっしゃいました。私も放課後などは時間のある限り一緒に遊びましたが、その経験があるかないかで授業に入ったときの児童との距離感が違うことに気づきました。

最後に、１でも記述しましたが、スクールサポーターを通して自分にしかできない先生役というものを学びました。ベテランの先生をみていると憧れや尊敬の念は数え切れないほどあります。しかし、１年や２年で習得できるものではありません。そのような理想像を掲げながら、新人教師としての自分像を確立したいと思います。なぜならば「自分はこういう教育を行いたい」という意思を持たずして児童を教育することは難しいと感じたからです。児童と一番年の近い教師として、児童にとっては近づきやすい存在であると同時に、甘くみられる存在でもあると思います。近づきやすいという特権を最大限に生かしつつ、メリハリのある教育をしていきたいと思います。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題、改善点・アドバイスがあれば記述してください。

スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点はないです。無理をせず、時間のあるときに活動できるように自分で計画すれば大丈夫だと思います。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？その理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？その理由を記述してください。

私は下級生にスクールサポーターを勧めます。それは、教師、児童を含めた多くの人々との出会いから得るものがあり、また小学校の現状を知ることができるからです。私たち学生が小学校に携わる機会といえば、教育実習です。教育実習は短期間で整えられた環境の下、基本的には固定された児童と関わることがほとんどです。休憩時間は他学年との交流はあるものの担当学年との関わりが多いです。しかし、スクールサポーターでは希望を出せば全学年の授業を観察させていただくことができ、より多くの児童と接することができます。また、より多くの教師とも接することができ授業展開の仕方の勉強にもなります。私は低学年に入ることが多かったですが、中・高学年に入りたいと希望し授業を見させていただきました。多くの先生方と接することで、教師の技をたくさん見ることができました。

小学校の現状は学校規模から抱える課題から地域によってさまざまです。将来自分がどのような小学校に配属されるかわからないので、スクールサポーターでの経験が糧になると思います。実際に、私は教育実習校と名倉小学校では学校規模など全く違いました。しかし、私は戸惑うことなく児童や先生方と関わることができました。自分の知っている世界が全てではないということを意識することで、スムーズに学校や児童に対応することができると思います。それだけ、教育現場では柔軟な考えが求められているということを学生の時に知ることができてよかったと思います。

５．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

私は年間を通じて児童の成長している姿が一番印象的です。２年間名倉小学校でお世話になりましたが、１年目は私のことを警戒し挨拶をしても受け容れてくれなかった児童が２年目の今では自然に話し

かけてくれたり、特別支援学級の児童が去年よりも落ち着いて交流教育をしている姿や言語数が増えたりしている様子を見るととても嬉しい気持ちになります。教師はいかに粘り強く児童と向き合っていかなければならないかということを痛感します。

６．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

スクールサポーター制度について、保護者の方は知っていらっしゃるのかと疑問に思います。参観日やその他の場面で保護者の方とお会いすることがありましたが挨拶をしても「誰？」という顔で挨拶されます。それが直接活動に支障をきたすわけではないですが、もし私が親の立場であったら学校関係者は把握しておきたいなと思いました。

観察実習レポート

教育学科　３回生

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの。

私がこの１年間のスクールサポーターとしての活動で得た物は大きく分けて３つあります。

まず１つ目は、児童にとって教師とはどんな存在なのかがはっきりと見えてきたことです。以前は教師は児童に教科を教えたり、集団生活の場で他人に迷惑のかかることをした場合に厳しく叱ったりという上から児童を見ることが教師の在り方だと考えていました。しかし、教師は児童と同じ立場に立ってはいけないけれど、同じ目線に立って物事を考えることが大切だということが分かりました。

２つ目は、教師同士で連携することの必要性です。担任教師は教室の中では一人ですが、職員室に帰るとたくさんの教師がいるうちの一人になります。自分のクラスの児童のことを他のクラスの教師に伝えることで共通認識ができ、他のクラスの教師もその児童と関わりやすくなります。職員室では積極的に周囲に働きかけ、情報を集めることが効果的なのだと知りました。

３つ目は、次の動きをイメージして行動することの大切さです。スクールサポーターの活動を通して教師の多忙さも実感しました。１つ１つ丁寧にやることは大切ですが、時間が無い時は的を絞って要領よく仕事をこなす力が必要だと感じました。

２．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

この１年間の活動で常に意識していたことがあります。それは、「私だったらどうするか」と自分に置き換えて物事を見ることです。教師は〇〇したけれども、私が教師だったら△△するだろうなというように具体的に頭の中でイメージします。もし、教師と自分の考えが違う時には放課後児童が下校してから教師に質問をします。この質問によって教師はなぜこのように行動したのかという疑問を解決することができると同時に新たな考えを知ることができます。

この経験で学んだことを、自分が学級担任になった時に学級経営をする上で生かしていきたいと思います。具体的には、児童を叱るときのボーダーラインをはっきり決めておくこと、児童の発言や行動に対する対応の仕方などがあります。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題、改善点・アドバイス。

私にとってスクールサポーターの活動は毎回学びがあり、非常に充実しており楽しいものだったので両立することは難しいことではありませんでした。むしろスクールサポーターの活動があったので両立することができたように思います。

改善点としては、スクールサポーターは具体的にどの程度教育現場に介入しても良いのかという定義が曖昧なので、活動する際に自分のすべきことが分からず戸惑いがありました。対処方法としては、配

属校の教師によってスクールサポーターの捉え方は異なるので、教師に何をすべきか直接質問をすることが最も良い方法だと思います。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？その理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？その理由を記述してください。

来年度も是非応募したいと思います。理由は、３つあります。

１つ目は、児童との関わりの中で、児童に対する声かけの仕方や支援の方法が具体的に想像できるようになるからです。教師になった時最も大切になることだと思うので学生のうちから関わることで様々な児童の姿を見ることができると思います。

２つ目は、授業の展開を見ることができるからです。同じ教材でも、その進め方は教師によって何通りでも存在します。また、計算テストの活用方法や漢字を学習する時の手順など、細かい所までしっかり見ることができます。

３つ目は、教師とたくさん情報交換ができるからです。実際の教師の仕事を生で聞くことのできる機会はスクールサポーターがなければ滅多にできることではありません。自分が疑問に思っていることを質問するときちんと答えてくださいますのでとても勉強になり、絶対教師になるぞという思いがよりいっそう強くなります。

５．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

私が児童を厳しく叱ったことが印象に残っています。私は、週に１回というスクールサポーターの活動の中で早く児童との距離を縮めて、児童を理解したいという思いを強く抱いていました。それにより、叱ることによって児童との関係が崩れてしまうのではないかと、叱ることに関してはなかなか踏み出せず、軽く注意をして終わる状況が長く続いていました。しかし、叱らないままでいると児童はこれはやっても良いことだと理解し、これからどんどんやるようになってしまいます。それは決して児童にとっては良いことではないということに気づきました。そして、「よし！」と覚悟を決め、怖い顔で厳しい口調で児童を叱りました。すると、やってはいけないことだということと、なぜいけないのかという理由をきちんと説明することで児童は納得ができたようでした。

叱ることは教師にとっても児童にとっても必要なことであると実感させられた瞬間でした。叱り方についてはまだ分からない部分がたくさんあるのでこれからさらに学びを広げていきたいと思います。

６．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

２回生の時から２年間のスクールサポーターの活動を通して、自分の教育に対しての見方が変わってきたように思います。２回生の時は、自分が教師になるということがまだ先のような気がしていて、日々変わりゆく教育現場に状況についていくことだけで精一杯でした。しかし、３回生になってからは、近い将来自分が教壇に立つことを実感するようになりました。それにより、授業展開の仕方や児童の表情・反応、教師の指導の仕方など細かい点まで見落とさず頭に入ってくるようになりました。これは２年間の中でも大きな変化だったと思います。

来年度は、今年度よりさらに広く、そして深く現場を見て自分なりに考え学ぶことができればと思います。

観察実習レポート

教育学科　２回生

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの

子どもたちは教師を含めたすべての大人のことを子どもながらに分析・判断しており、いつでも私たちは見られていると感じました。大学の授業の一環とはいえ、子どもたちからすれば私も“先生”。はじめはそう呼ばれることにすら違和感があり、どこかくすぐったいといった感じでしたが次第に教師を目指す者としての責任と自覚が芽生えてきました。

朝早くて眠くても、大学の授業の後で疲れていても、子どもたちの前では背筋を伸ばしていなくてはと思うと少し気が重くなった時もありましたが、子どもたちの無邪気な笑顔や元気に走り回る姿はそんな私のマイナスな気持ちをも吹き飛ばしてくれました。

大学で 90 分間椅子に座って講義を聴いているだけでは絶対に得られない、小学校のリアルな現状を心と体で実感することができ、何より本気で教師を目指そうと思えたことが、このスクールサポーターの活動で得た一番大きなものです。

２．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

今回私は主に２年生の教室で活動させていただくことが多かったのですが、一度４年生のクラスにも入りました。その時に、２年生と４年生の子どもでは自我の強さが全く違っていることに驚きました。２年生の子どもたちはまだどこか幼くて先生の言われることに全体で従うという、ほのぼのした雰囲気でした。しかし４年生の子どもたちは「私はこうしたい」「僕はこうだから」といった､非常にデリケートで、一歩間違えれば今にも喧嘩が起こりそうなピリピリした雰囲気でした。４年生の担任の先生もすごく大変で毎日が戦いだとおっしゃっていました。しかし、こういった状態が決して悪いという訳ではなく、子どもたちはこうして成長していくんだなと思いました。

スクールサポーターの経験で、小学校は学年やクラスによって特色や雰囲気が全く違い、それに応じてこちらも迅速に柔軟に対応することの大切さを学びました。子どもたちの心の声に気付ける教師になりたいです。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題、改善点・アドバイス。

前・後期ともに月曜日から金曜日まで授業が詰まっていたため、丸一日スクールサポーターの活動を行うということが不可能でした。特に、午前中スクールサポーターに行って午後から大学に授業を受けにいくという日は時間に余裕がなく、授業との両立に困りました。

また、先生でも友達でもないという中間の立場から、授業や子どもに対してどこまでつっこんでいいものか。と悩む場面も多々ありました。もちろん、先生方は私たちにかまっている時間があったら子ど

もたちに... というほど忙しいとは思いますが小学校や 担任の先生ともっと打ち合わせや話し合いの時間があればいいなと思います。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？その理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？その理由を記述してください。

授業との両立や体調面のことも考えて、３回生では応募しないでおこうかなと正直悩んでいました。ゼミの先輩に相談してみると、「半日と一日では感じ方が全然違うよ。」とアドバイスして頂きました。また､スクールサポーターでの体験談をお互い熱く語ることもできました。そうやって話している内に、自分はこんなにも小学校や子どもが好きなんだなと改めて思えました。スクールサポーターという経験を通して知らず知らずの内に少しは成長できたのかもしれません。

３回生では介護実習や教育実習と学校を離れることが多く、そんな中でスクールサポーターをきっちり充実させることができるかどうかは不安ですが、空き時間さえあればまた応募して、現場での経験を重ねたいと思います。

５．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

小学校に移動ミュージカルが来校していて｢泣いた赤鬼｣の公演を子どもたちと一緒にみました。ちょうど私も大学の声楽の授業でその歌物語を教材で扱っていたところだったので、とても興味がわきました。内容は赤鬼と青鬼の悲しく切ないストーリーなのですが、歌とダンスで会場はとても盛り上がりました。

終演後２年生の子どもが泣いていたので「どうしたの？」と聞いてみると「なんだか分からないけど涙が出た」と言っていました。こんなに小さな子どもでもストーリーをしっかり理解して感動の涙を流すんだなと、子どもの感受性の豊かさに感心しました。

子どもたちが書いたミュージカルの感想文もしっかり書けており、中には絵で表現していた子どももいました。やはり文化や芸術などと触れ合うことは子どもたちにとって大切で、ミュージカルという非日常的な時間は子どもたちの心に大きく残るんだなと思いました。